

農業経営基盤強化促進法第18条第1項の規定に基づき、公表します。

藤枝市長 北村正平

市町村名 (市町村コード)	藤枝市 (22214)
地域名 (地域内農業集落名)	稲葉 (宮原、寺島、助宗、堀之内、谷稲葉、瀬古)
協議の結果を取りまとめた年月日	令和6年12月 (第7回)

注1:「地域名」欄には、協議の場が設けられた区域を記載し、農林業センサスの農業集落名を記載してください。

注2:「協議の結果を取りまとめた年月日」欄には、取りまとめが行われた協議の回数を記載してください。

1 地域における農業の将来の在り方

(1) 地域農業の現状及び課題

- 農地は傾斜地と平地に大別され、傾斜地では茶、ミカン、タケノコ、平地では水稻や施設園芸、エダマメ、レタス栽培などを主体として営農している。
- 有機栽培等を取り入れた高付加価値のお茶を生産、販売する生産者が増えている。
- 分散している「担い手の農地」を経営体に集約していく必要がある。特に有機栽培の茶園は病気や虫を呼んでしまうため、慣行農法の農家や近隣で生活する住民との間に軋轢を生まないように、有機栽培のエリアとしてをまとめる必要がある。
- 畑作では、季節ごとに多品種の野菜・果実が栽培され、地域内をはじめとする農産物直売所で販売されている。
- 鳥獣(シカ、イノシシ)による農作物の被害が著しく、駆除対策を強化したい。

(2) 地域における農業の将来の在り方

- 現在、担い手となっている経営体に農地利用を集約していく。
- 耕作放棄地に対して、地域ぐるみで対応している組織を有効に活用する(多面的機能支払交付金)。
- 居住地としても魅力のある地区としていくため、農地と居住地を分けるなどし、土地利用を検討していく必要がある。
- 他分野の産業との連携により、お茶や柑橘類を利用した6次産業化を推進する。

2 農業上の利用が行われる農用地等の区域

(1) 地域の概要

区域内の農用地等面積	375 ha
うち農業上の利用が行われる農用地等の区域の農用地等面積	375 ha
(うち保全・管理等が行われる区域の農用地等面積)【任意記載事項】	ha

(2) 農業上の利用が行われる農用地等の区域の考え方(範囲は、別添地図のとおり)

- 農業振興地域内の農地を基本とする。
- 住宅地周辺の介在農地については、周囲に暮らす方が望む居住環境との調整を図りながら、農地利用を継続する。
- 傾斜地の農地で、過去に茶園やミカン園であったが、現状は荒廃しており、耕作再開が不可能な農地は対象区域から外していく。

注:区域内の農用地等面積は、農業委員会の農地台帳等の面積に基づき記載してください。

3 農業の将来の在り方に向けた農用地の効率的かつ総合的な利用を図るために必要な事項

(1)農用地の集積、集約化の方針 ○中間管理事業を活用して、耕作者と耕作地、栽培品目が効率的になるように、受け入れ意欲のある担い手に集約していく。 ○新規就農者の育成において、地域は県、市、JAと連携して、就農しやすい環境を整える。
(2)農地中間管理機構の活用方針 ○農業委員会やJAと協力して、規模縮小や離農を検討している農家及び農地の情報や、受け手となる担い手の情報を集約する。 ○農地バンクの利用について、相談窓口や手続きなど詳細がわかるチラシ等を作成し、農地所有者に共有する。
(3)基盤整備事業への取組方針 ○効率的な圃場に向けた、水路等の新たな再整備を進める。
(4)多様な経営体の確保・育成の取組方針 ○静岡県農業振興公社の持つ、地域内及び近隣市町や県外の担い手の情報提供により、多様な経営体の確保を図る。 ○新規就農者に対して、県、市、JAは十分な指導体制を確保するほか、初期投資の支援について検討する。
(5)農業協同組合等の農業支援サービス事業者等への農作業委託の活用方針 ○農作業等の請負について、JAが窓口となって請負組織・団体についての情報を収集、整理する。 ○収集、整理した担い手の情報について、農地所有者や高齢の耕作者に情報提供をしていく機会を作る。

以下任意記載事項(地域の実情に応じて、必要な事項を選択し、取組方針を記載してください)

☒ ①鳥獣被害防止対策	☒ ②有機・減農薬・減肥料	☒ ③スマート農業	☒ ④畑地化・輸出等	☒ ⑤果樹等
☒ ⑥燃料・資源作物等	☒ ⑦保全・管理等	☒ ⑧農業用施設	☐ ⑨耕畜連携等	☐ ⑩その他

【選択した上記の取組方針】

- ①イノシシ、シカ、タヌキ、ハクビシン、アナグマ、カラス、ヒヨドリ、ハト等の鳥獣害対策を進める。
- ②有機栽培農地と慣行栽培農地のゾーニングや有機栽培農地の団地化に向けた地域の話し合いを継続していく。
- ③施設栽培などに、ICTを利用したスマート農業を利用できるように研究・検討を進める。ドローン導入による農作業の実情について、安全性や性能紹介を農業者のみでなく、農地周辺の住民に紹介する機会を設ける。
- ④販売利益が上がる栽培手法などを模索し、実行する。
- ⑤みかん園を維持するための作業道を整備する。レモン、イチジクなどのブランド化に向けた取組を進める。新たに取り組む苺栽培等の施設費・設備費を補助する取組を充実させる。
- ⑥燃料費の高騰による負担を軽減する行政支援を検討する。
- ⑦地域ぐるみで農地、水路、農道等を保全補修する組織を活用する(多面的機能支払交付金)。
耕作放棄地の抑制・管理方策として、市民農園化を検討する。
- ⑧水門等の老朽化や、離農・高齢化による管理する人の減少等の問題解決のために、施設の省力化・電動化を図る。